

○試験から帰って

母 「どうだった。」

T雄 「試験おもしろかったよ。キシヤポッポやったんだ。ジャンケンで運転手と車掌ときめたの。」

母 「T雄ちゃんは。」

T雄 「車掌！」

母 「T雄ちゃんのお友達いっぱいいたでしょ。」

T雄 「ウン。お母さんが一しょじゃないって泣いてた子いたよ。」

(あんまりしつこくきいてもいけないと思つて私からはきかなかった。お食事の時などに少しづつ思い出しては話していった。)

○試験結果発表の前夜

T雄 「幼稚園に入れるかな。」

T雄 「どうして入れたか入れないかわかるの。」

母 「『この幼稚園に入ってもいい人の名前』、って紙に書いてはつ

てあるんじゃないかしら、お母さんの小さい時そうだったわ。」

T雄 「名前が書いてなかったらどうするの。」

母 「その人はおっこっちゃったのよ。」

(内心しまつたと思つたがもうおそい)

T雄 「おっこちるって……、上から？」

母 「その幼稚園へは入れないということ。」

T雄 「ぼくの名前出てるかなあー。」

新入園児を迎えるにあたって

幼稚園へはいることにきまつてから四月の入園式まで、子どもたちにとっては幼いながら期待や不安さまざまな想いにみだされる日であろう。親のなかには子どもに何かさせておかなければならないような気がして落ちつけない親もいるかも知れない。幼稚園でも先生たちは今度はいってくるのはどんな子どもたちだろうか、どんなことをしておいたら子どもたちが楽しく毎日をすごしてくれるだろうかといろいろ考えていることであろう。はいってくる子どもたちとその親、うけいれる幼稚園と先生たち、どちらにも準備が必要である。ここでは幼稚園として新しい子どもたちを迎えるについてどのようなことを考えておくか気づいた点を二、三あげておきたいと思う。

(1) 新入園児保護者会

幼稚園としては、子どもたちが幼稚園生活の規則正しさに早くなれるよう、家庭でもおきる時間ねる時間に注意するとか、自分でできることは自分でさせるなど入園前の準備として考えてほしいと思う。まとまつた形のある絵をかけるようになつてほしいとか、自分の名前をかけるようになつてほしいなどは決して要求しないし、また、幼稚園でおりこうにしていくように、家で子どもにもいい聞かせてほしいなども思わない。生地のままでもいい。幼稚園に来てみて、「いいなあ」と子どももころに感激をもつて新しい生活にとけこんでくれることを願っている。幼稚園のうけいれ準備と家庭での準備とがくい違つて、子どもが失望したり、ひどく緊張したりするようなことになつてはかわいそうである。幼稚園とはどんなところか、を親に知つてもらうために、新入園児保護者会を計画している。それは幼稚園の教育方針というような大きなこととはもちろん、毎日の生活がどのようであるか、また持ち物やその他こまかいことも含めて親に知ってもらい、保護者心得などよく目を通して、

○試験合格の夜

T雄 「いつから幼稚園行くの。」

母 「四月から。」

T雄 「四月っていつ。」

母 「そうね、たくさん寝てから。」

T雄 「五つくらいねたら？」

母 「もっとたくさんよ。」

T雄 「だって受かったんでしょ。」

母 「そうよ、でもまだまだ。」

○翌朝

T雄 「オボ（犬の名前）のおばちゃま、ぼく幼稚園うかったよ。」

隣の人 「そういいわね。」

T雄（母に） 「お母さん、お母さん幼稚園いつから行くんだった」

母 「四月から」

T雄（隣の人に） 「四月から行くの。」

○その後

一九六一・一・二二 遊びに来た叔父に

T雄 「ぼくね、幼稚園うかったよ。」

叔父 「何という幼稚園かい。」

T雄 「○○○○！バスに乗っていくんだよ。」

叔父 「バスどれにのるかわかるかい。」

T雄 「お父さんに行く先を紙に書いてもらうんだよ、それでその字

と同じバスにのればいいでしょ。」

幼稚園の生活についてじゅうぶんの理解をもってもらいたいと思っている。入園後も保育をたえずよい効果的な形ですすめてゆく上には、家庭の協力がぜひとも必要であることを考え、新入園児保護者を意義あらしめたいと思う。

入園したばかりの子どもたちはほとんど「遊び方」を知らない。はじめて大ぜいのなかにほり出されて、話し相手や遊び相手を探めながらいい知れぬ集団の圧力をうけとめているのが、せい一杯というのが大部分の子どものいつわらざる姿ではないだろうか。このような子どもたちの緊張をときほぐして、仲間とのふれ合いをより早くすすめることができるように、先生は遊ぶための材料や場をととのえてやらなければならぬ。材料に高価なものはいらない。一つの木片でも子どもが手にとればりっぱな汽車になり船になる。種類もできるだけ多くまたゆたかでありたい。こんな物がある、あんな物がある、これを使って何をしようかなと子どもがみずから遊びを考え出すこともあろう

(2)遊ぶための環境をととのえる。

入園式の日には年長の子どもたちが自分の作った、風ぐるまや手さげなどを新しくはいった子どもたちにくばっている様子はほんとうにほほえましく、またもらった子どものほうも幼稚園に親しみを感じてくれるようである。また、年長組が劇あそびやリズムあそびなどを新しくはいった子どもたちに見せてあげるのも一案である。年長組は大きくなったのだという自覚をあらたにするであらうし、新しくはいった子どもたちは、生き生きとした楽しいふんいきのなかで、自分がいかに成長しているかとうとする、新しい生活の一端に接触することになるからである。

が始めのうちにはやはり先生の援助

(東横学園二子幼稚園 河尻朋子)